国立公文書館
National Archives of Japan

彰考館藏書

九重の御雲ゝ山陰ゝ岩かゝ
極ゝ志ゝて志ゝやゝ世を思ひ侘士あり。
ひろゝゝ瓜ゝ畑ゝの八ゝ幡ゝ津の地ゝ
伽乃水ゝ山の井乃ちゝ流れをくゝみ
せゝく。ゝ末ゝとゝて乃ゝ流ゝ
風ゝ吹ゝ岩ゝ末ゝ紫末の露ゝとなゝ
雪乃世中ゝ和ゝ味源ゝ
ゝうゝとゝく。ゝ流ゝ
出乃ゝゝ和ゝ反ゝ
世ゝ和ゝ乃浦ゝ

山乃末葉にかきあつめて。吳作集と名
はをとりて隈士乃吾友としてたの
ゆうしやゆ。童蒙のあきらけさをとり
はくもび板に寫れたるべし

吳作集卷第一

い

いはさき乃宮と　伊勢乃賀茂の齋宮乃はしめ也
皇の御女にまします。神へ御よめ入のはしめ
いはきこのゝやきの法をやきそ　と云句は
かきもむなしきはしめ林乃ゆへあり　宗祇
伝法乃名字をもつて居ておくりまたと也。雲林
院の僧ゆへまて。齋宮へ御のぼりと也。雲林院
賀茂へ　ちし
佛乃御名にそとゝまる　とゝ句は
終に新いつきの文に法と云て　蓮載

詞花集は選子内親王 実成乃家の所あり
むもひてよめる
思へども云とていふにあらぬ事なれそ云ひてねとよこそ
あるなる所哥也 家院とよむ又家の一字
まくもいつさのことくとよむ也又実成まくもと
家院と云則あり也川の御所の所事なり
伊勢まくい家之作新作の哥とも入いづれも
仏法を云ふ子細ある事也
○家乃西と 生国といふなり
○いとを物と 又百歳の事なり
○くくゝ湯と あくられぬ事とて正月十四日十

六日は禁中にてあり十四日は男踏哥十六日は
女踏哥と云 大子より綿を給りていぐ紀て来
ふなり 手弁行夏は 夏世々
○泉 滝乃事なり 天石山は四十五尺乃滝あり
これを瀑布の泉と云也 泉連哥は云也
○いさもると 打檻也 下知をする所をあり又人を夫
見人をもとも云也 諫と云
三弱乃いさもる器ふあるをもうそとこひ八清る白川
とよめるを下知する也
○いまはれ名と かぎりの道也 今般と云 越て今と

をもて限りたりぬいまは別るゝ死なるは限り
ぞ恋のちりもおかくるあり
新古
とはそたのむの原も折まひぬ朧月夜の明ぬるを
同
神垣はまだ深雪に埋れ木の花とぞ見る春の来れば
○いとも かしこし　宮こ
下畏とうさてうちとあるは又賢とも云
○いをとりはと　神代より戦ひあるとて戦ひは絶
ぐくはぱ山石柏乃ごとくあぐれとて御笠をば
ゐらぐけく本紫のごとくあぐらぐそれとりゐ
を面柏とつ嘉門いをとぐはとあるも岩れ
事なり

○いを竹とは　賀茂系乃時竹を立て人と云也
○岩ひさゝ乃とは　岩をとゝめあるゝ乃也
○いをりとは　いをりとへゆくと云説
○いをぐ忘とは　いをぐ家乃山也
○命ぶむふとは　二説あり第一は狩乃字とも
又寿とも也　いれちとひとし也
○きに続たゝめ小君と見てこゝは命にむる我恋やまゝ
むさゝ乃命にむふ恋とは乃ちゝ小君ゝ
○いとはあるやとは　いとゝありと云て小也
○いれひをとは　指衣乃紐也　紐を紐とてあり
○いくとは　何ぶても多きまゝなり　弟兄と書

又業作　業交とのたまふも左よおなじ

○いとぐるまの田を作れぬるとき時なるときでのたとえをかるみぐ

○いとぐるまのをとをたなる紀の葉ゆへ聖べよ云ふ日と書たり

唐へれいとうの西をみがくとをそれも色紙の表背

○碓下　雞鳳よりあるをとめんとていとうをおろたる

小あや川ふるひあるべうこと

漢出る遍乃小あの碓ちかう所と云ふとうこと

○とちぐとよ　とちぐしも也　宮ちいまふとちぐ云ふ

とうこうこと也

今ちぐと碓うし物とさがふ乃衣ようう我とそれひ

いとうこうこと今ちぐとうこと也

○いうこと　碓乃事也　碓臼と云ふ乃事

○ありこうこうこと云ん

○いとぐるまの開　天の事也

岩戸山あるの冥ものとそ昭るをあふ芸ふふ

○いうをもせあと　いやとも知ふとをいとあ也又いうを

いやせを行歩也

いうをもいひとうれとうこと和ふ乃ふ也

だ乃河ちふ知やまうこうれ女をいちとをいひと

ものとうこうれだとうこうこうこう

宮殿上の乃れをくるいる毎乃いるふあうこと月

をうこうこまて君

○いざよひ乃月とハ　倡月と云。いざよふハ日やすらふ心也
猶予とも云。又不知夜とかくなり。一説いざよふハ月をそ
十六夜の月と云。十五夜乃月よりハいざよひてをそく
出るによりてやすらふと云ふ。いざよふ。源氏物語にも云
いざよふ月ハゆくりなくあくがれんことをいとはし
覚え十五夜乃月へくさ。十六夜にならず事ともいひ
乃りこれを月のいざよひとしてもはりてやすと
らふこゝろ也いざよふや
○いらへとハ　物とふ返答乃事也
○いらかとハ　瓦ぶき乃家なり甍と云
○いなかとハ　都の事也。洛中乃外ハ皆田舎

なん／
いなむしろとハ、さのみそひらるゝ蝗虫もたてぬ御代にて居ゐる
いなおほせの世やとてよみて庭をせまり門田乃稲をとり刈てる
いなきは民のいとなみ也を世に流したまふ御調物にハ
○いさめとハ　あいしさるなり也。又いさかひをいさむる
諫とも云義なり
いさめに時まつまゝの日ハあるいハせとハ人まかせといへ
いさりまへし物と田子乃浦にさるなる漁並一夜にかゝり
掠措つくれ松人いさりめぶりあそびにせんとつくりてまめやハ
○いさ花とハ　ねられぬ心也
○いさよふとハ　徘徊と云。雲や泪やみなとのめぐるよ

俗也。又いぶるのかはさるこの事也。諸門とも
人をうらぶ新ぶ人はこの城郭の内の木くれ
家屋の内のうちにはさるふん也
○いさるとは あつまさいかり。樂とも。又人をいうる者
とのつをおれ
○いでるよとは いでとはちひ出る也。ろくとはそこ
いつかも也いこそよ人とをれやうをれとをれ。見人
とも。第をかよはこの乃字をとあり。諸門やみさて
もかなどいつんつもうるうり
あるる山ぬたの家原風吹てそよ人を忘れやいう
忘いふ新く忘るうれもあっありとはうまもむらはは

いで人をこそよそれ月まれうはい心を也ことふて
我をもとをいそぐまづさとはいでやはおあさるる
○いはるとは いはとり也。文字をへるる也。又いつはあれた
とは。ゆをいつをとりとるる也
いはをとはは。ゆどれの歌を物ものれざう成る
○いとは勞めて 宿迫とも。いとを宮也せあていはせあての
ことにをる也物とはをとく思ふん也
いとせあて意 きはをうばの乃衆の意とをてをる
これをつとく物ものよさる也
○いををとくぬるとは 寝安なり いとうれをもていの
新られぬはやとく寝ぬ也。い文字をいづもぬるん也

第三ハ寢字宿字とかりて又いねぬそといひ
げ[illegible]ことを用ゐる也寢寐とも
[illegible]ハ[illegible]かさく成ゆくハ我やいをねぬ人やもと
いをやとそねられざりけるまゝ乃我ハむ乃草と葉つ
時自一あり[illegible]ハ心とまたさいやハねらて
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]人ハあ[illegible]
[illegible]ん[illegible]
[illegible]
[illegible]

まくまくらなる所也
○いさとらだとハ とらだとらみ河ゆくさま河也
人をいさ四を[illegible]ハ[illegible]
○いろふとハ あらそふ也[illegible]
○いまあひ 日没 入わ 晩種 いづれとも也
○いげさ入さとハ 出ることを入さま也
○いまあれとハ 明ることを業月乃ゝ河也
○いもせとハ 夫婦なり 妹と女 背ハ男也 夫男
妻女 ほそとゝん也
流てハいもせ乃山の中に落さらみ川のうゝや世界
吉野よ妹山背山とて西その山乃合とゝなるゝ川と

よし乃川と云也

○いりせんとハ　何となくなどいへる詞也

老が身に秋の夕をいりせん　是ハあはれ也

といふうたもあれバいりせんもいりせん

身にしみぎり浮世なりとも思ひすぐせむ

此二句を力なし何ともせんかたなくいへる也

此心をもち侍る也

たとへば田舎ありともいりせん蓬乃宿の秋の夕暮

○いほのくさむらとハ　庵を納る義也

○いそがしきとハ　いそがしき也　閑と云

○いは色とハ　常也　常住不断のなる也

おもてには心は和哥乃道によりても紀貫之の浪や

○いろはとハ　いろは歌といひし詞也

○石井とハ　小川とハ　いさゝの紀河也

○いくたとハ　名光の紀乃事也　蓮葉のおり

生実と書なり

亀山は生業ともかれハとらめんにはな紀別の

○いちしるしとハ　鶺鴒と云り口伝有　編員となると云

或説にて紀ともいふとも　唐ともいへり

説く多き也　宗家乃説ハ名なる紀也

さりまして編員なる乃嗚なるを見がたくとてふひとなれ

里などてれるべからずとまうしも編員なる宗なりけり

然の田乃いなおかせなるの、ぶれども撓りよし比ハ雲や深ゝん
なやまさべ狩田男乃面乃鍋の足いなおかせなる比おなじ道
我門よつくる山田の穂より穂ぞ摘員なる乃おもてなる也
判者云穂ふつきそとへ優なるべき〳〵摘員なる
を薙とのふと傳るとぞや性なりしぬ下説也
世中にいなおかせなる乃あらゆる世べきいく代乃数らせてさる宮
〇いなりの事なし、その鶺鴒とも いなり乃血を女ふみつれまそ陰
陽乃あらしつまそる也。女の嫁するせなれど、ハ付ても陰
血あちざる也。たいなりを、書宮といふ也也吉御井
たまふとりげに似て尾あり蛇虫乃よ足つきたる
とぞ。いなり乃血をとりて女人のひざつよめれば、松

乃情あるは深へとも書ちぎとやうぞおれふようまく
宮祗なるとハ名付侍りて宮を女乃おうふなれバ
女をとる穫をされハより〳〵まふり。又惜物恋と云
書てをおもうふ朱をとりひてあくしまくぞ血を
ちりく女乃身まあかだ一路乃るうきる幸遠
ごろしつらぬ終ふるまひをされでもきうんうきとうし
見えぬもり。内典外典の説れ遠ある也
〇ぬぐ背乃宮まるこどれかさされバわかり此道とかる
〇ぬぐ背のうきまれよのすゞ女乃みそうでくりともうふ
ぞおきるく門のとおつうかさるりてらぬざさとち侍
とのつり。さてくくハよある

ちるらんよたびさふつくし世乃なかのあはれなる人はいづこにか
あまねくも我おもふくむ唐(もろこし)のかほとりもちり隠(かく)れそれ
○いとふれとは　いとひあきらかなり。いとひてすてるとも
いとひ捨るともいふ
○いそで　とは　此ことば乃心乃やうあまたにかよ里
是にいそでいそぐことのはともちらん　此白れん
きゝられたる雨露あらかに僅西
我恋しさばいそでぬたく人　是ハつみて
うちはらへんと物がふいそでなり
たちあらいいて数皆(ひは)…んなる白河乃関(せき)ハあそぬと
あれをねがひにいそでなり

○いぶきく　とハ　いぶきくもあふ紀妹(て)よあふいぞてといへる
詞ハんでもとろ花葉なり。女乃文などふる色それ
いづれや文物おもてらしこさやうなる事をも云ふや
一説に大蔵(おほくら)ちう乃紀にハ。又いふくいやしみなどいへり
○いぶり　不審(ふしん)と云　あつき乃実そその家よ
ちる夜乃月ふいぶり待のあき　紹巴
○いづすらせて　とハ　ゆりしかりおもてなり
○いでゆ　とハ　温泉(いでゆ/をんせん)也　○いはしり　とハ　早晩いつとも云詞
さそしれ入…の落(さき)ちつ尾(をだる)ともいはしりの妹が手枕(たまくら)にせん
あれをいはとりいなん也いけりの手枕にせんと詠ぶ
ありての事也

いたりもとめてゑんむすぶのかみ堂へのぼる事
あれをいはんとて云なり也。しかはあるべき
なりはとあんをめぐらしたる紀
○見たる事なり事を云なり
○我高の苔の下にとうかんをうかべ
これをたのめよ人のいはんと也
○いたりもとめをびめりんをうむ松の下に苔おひつもれて
見たる人のいたりからうたの事なり
○岩根も松初瀬山とは松むら松図おなり名花也
又いそ木とは松をそえ一説に松乃緑也
○いちたるも　掛雪と云まれなる事なるべし

又ちとびれぬる事かあたる事とかり
○ちりこぶのやまをとゝ雲はるかにちる紀行なり
○いつくたさは　とは　今始とも云　とかりとも也
○いつもとは　とは　とは　今始とも云　とかりとも也
○俗ものをとる図なをとる分をつくりてもをんなを
○いちやぬとは　品遠とも云　知遠とも。うちつまかん
いちやぬとはなるべきをおひとして　蓋如
あれをけるとき也乃ん也。物をつくあらくむ
○ふるとうたなり
○いをびれとは　あがるなり也
○いさびき乃などは　なるべき紀行乃お　紀巴

○いをね　繋と書。あり又は結を作る事なり
○ちゝあまバいづちゝ物と通ていをあり屋敷記ちゝあそ
○いさゝら小川　遠小川ともいふ。あさてゝろゝくと流る
　行なり。いさゝ川ともいふ。小川ともいふ。面ゝくと
　通をあり乃ちゝぶくとも云
○いさゝ水とハ　小あみなる也　又庭のたまり水とも云
○あさゝ井とハ　井とゝくさゝゆゝ事也
○いとさゝとハ　こゝちゝ面ゝとも云　細面とも云
○いとゝあとハ　糸水ゝ云面ゝ事也
○いさゝとハ　息緒とも云。出入いき也。いきれとも面ゝ
　ゝも又息絶てゝもゝあり

○いさゝひゝくとハ　氣ゝと云　意也
○ゝゝ上とハ　布巾ゝゝ拭物ゝ
○いさゝ　香ゝ也ゝ云。稲ゝハあゝぶ。ぶゝ也ゝ
　ゝゝ云也。一説ゝ出風出ゝ云ゝ川ゝ稲ゝゝ毋乃
　ぶゝゝゝゝ。ゝゝとのゝゝゝゝ人のゝらを
　ゝゝゝ物をいゝとゝいゝゝ仰ゝゝ也
　穴上の乃ゝゝぶゝ稲毋のいゝゝハあゝ月ゝゝ
○いさゝ魚　漁毋ゝ云魚ゝゝゝ也門ゝハあゝべゝゝ
○いさゝ火　求食ゝゝ云漁船ゝ焼火也
○いさゝ風　伊意保沼ゝ吹風也。上野ゝゝ
○いゝゝ　いゝゝ海ゝゝ也。陸地ゝ云

○いどむとハ　あらそふ心也。但恋路などにいどむと
いふ時ハなびかぬ心なり。挑と云。又いどむとも
あらそふ事なり。いさかふと云を同じ
○いそぢには　とハ　いそぢハいそとせと云事なり
いそぢまはいそぢハむそぢにさらずして心ひとつま(で)続く也。
いそぢハまたいそぢの程ハいそぢれどいそぢハ猶よろし。記
と続く事なり
○いのちのみ　とハ　なみだの中なり
いきとし生るものハ然りとなれ命此身の流れひとつがて
○いとる記　とハ　いとうしる記也　勝云と云
我もとらしもの物を思府(?)なる深のいとゐるらん

ひくてしのおくものいろなくハ秋の夕暮にあはれなるもの
萩乃池の面をおもふみそぶの葉乃置のいとる見えぬなむとも
○いと竹　とハ　糸竹ハ楽のもの也。竹は笙笛の類也
○いとゆふ　とハ　春の日影にちろちろとみゆる物を
云也。いとあそぶとも　いふ　蜻蛉と云
○いそくうちて　とハ　いそくうちてなり。世俗に
いそくさとなる也
○いもせのもら　妹　をとこいもしき也。別乃義なし
さ夜乃寝所くらきにべし　妹を恋そおもひねのにてもれ
○いさよひ　常なり　五月とも続きなり

万人まねぶべきよ結ぶ世の常四つ〻の月をとろまて
常とむすびてとり屋月と結て仏を法花也
金ろかうさ結をとろ〻ゝ〻ゝこゝろ花紙をいろ〻〻
空〻〻く月をとろまて　とよ句よ

人〻まねぶべきよ結ぶ世の常　後人不知

○わでの下常　とハ　女乃まをる紀よ結りとをゝて
常をとゝ〻せ一章あり。大和物語よ多
紀〻〻わでの下常引ゝ〻ゝあせられを玉川乃水
山城乃わでの下常ひを結ひ松ゝ〻ひを元世を〻
みちのくのわでの下常引紀ひをれを〻〻　和名抄
いとゝ多なれとゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ

下常乃むをひもをとゝ〻ゝ〻ゝ　宗祇
露をとゝ〻ゝ〻ゝ乃中を　とよ句よ
ゆゝ〻ゝ山のをゝ〻ゝ〻ゝ　宗祇

○いゝ〻ゝとハ　いゝ〻ゝ加也　ゆ世事なり　孫とも。又いゝ〻
ゝ〻ゝ行ゝ〻ゝ。一村づゝをゝ〻ゝ〻ゝ
分ゝ〻ゝいゝ〻ゝ松を惜ゝ〻ゝ〻ゝ　ゝ〻ゝ〻ゝ
○いゝ〻ゝ松とハ　磯松　あゝ〻ゝ　石松也　七夕れ世のなゝ〻ゝ
ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ
彦星乃天の岩屋山ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ
○逢坂　秋也　逢ゝ乃坂也。逢乃字とも古也。まを渡
ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ

物をとりて西の方に風をあらしの方へ人社のぬさをひふ
○いな越とは　稲乃ほたの人の神社を也ぬさをむしろ
ともいふ又稲をあを風乃ゆふさくれ物とも
ゆ柳といるむしろともあり
社田乃うしろの庶のいな越月やどれとも高き家乃
軒このたびつれいな越をさすとも見とんしもが
嵐吹をれ柳乃いな越かりこく波よ陸せてそ乃
もも乃もとく〜あれた稲越をよりこくもも柳の葉
これもとくもの乃ふ柳乃糸のみとれもをいな越
乃やうなるといつ義也
○稲ぬふのもとは　いな乃柳のもれるびくやうなるとも
ろびとも物のあるもとと
うつる田乃面よりびくや社のぬさ　宇治紙
はるいるぬふのもとはれんとう
○つ〜ら〜乃野中の清水とは　あれをもとのかつら
ぬるもとを云ぬを僧を植武天皇乃御時ぬを俗宮
春下九とのつ人俗ぬをかりてもりをる時。橋
廣の市面乃聖市なる水をくをて吾ゆりを
ぐめでを死みたりとつよをとりてるぬを後程へ
て京へよりたるもとりをる。病乃屋よ卯をあほ
とうをふぬを時おりをやうハ。我ろれをを市を
乃聖市をてむをびゆりしみんをうしをび

よくのだるを飲ませてぞくなりちうんとて飲ませ
ぬるをうとくめるくなりたれどもとうきみと
思ひしめるもの有。かくもゆうもうれそうて飲ませ
た。則病平癒しうるさうふうてりてれん
うらぬ事にしある也

男乃りとれ如ようりをむとゆのそ女のまうる
我為をいとく清くや成ぬん聖人乃清水浄き
古乃聖人の清みぬるをとりものをもう入をそむ
いうつの窪中乃清水乃ふかふさんむ泡ふくそう
いうりらどとい　ことうりもうるどもいひたれぬ
泡とうひらぬ泡とうる也

昭ぬとていまうれ四つくうふなどいひらぬ思ひきそうん
○池水乃いひしい　池乃堤さむ教ないひとうみれ
ようり池みうる出うる也ようれと池みうりいひうるとうう
城乃うるとうるう

池みのいひうとぬとや思てんうるとんをいうるべき
池水乃いひ出うる事乃うるさうれどみこうるうるうるうへ
小出田のうりうる水乃絶ぬとも池のんれいひきれうる
中くみいひ出ぬるいう乃我ん　とうふ白よ

神ちうくうるとうるれ。む池み　宗伊

○いぢうるとい　めじあるに也。いづくいづこいづちなどん
同じ。又倍よどうるやとうまうるいう

まきれのこるやいづくこゝにあるぞ紀乃国の浜名津の浦をもとめよ
おの白ひさいづくに掛むこゝろかなしたりけるを
○いとゝあはれとい　天のさくめとらん人名を永き天とかけ
ふを岩海とゝ　天の名を海とも云　一説天の岩
船をひくゝとのまてなくしのひとゝ紀伊の国
久くの天乃さくあら岩海とゝ海とあをふるかも
○岩代乃結松と　孝徳天皇乃御子る皇子
おのめくまあらくるや岩代の松を結ひて
こゝとあらくもゝ久
岩代乃濱松ゝえを引結ひまくあらんとゝ海とん
たゝくるの白くるの世をのそむ　ようあはさりくれば野中

と家とゝて侍りける　岩代乃松をむすべた
伊まも成就をゝとゝ　中をゝ　ぱ松をむ
をべてはあふくるのいのちまくもなりぬ
○しるぶ　又は松をとゝく人なくてくちてふるぱ
あるゝとよあくこの
岩代乃船中にもてゝ結ひ松をとゝけむ　昔ありけ
いとゝ岸の松ゝえ結ゝん人ゝくゝて又見ゝんも
○いとゝ玉と　生霊とゝ　なまゝゝの事也
ゝゝやゝ思ゝあくゝ松をいとゝむとゝ才をゝふる
出くゝ伊ゝ色ゝとゝくゝとゝ人　とゝ白と
○ゝくゝあゝおゝくゝふむくゝいとゝ　心敬

○岩さうとゝ　とハ　山川乃水の岩をきりとゝ
てゆくやうなるゆゑとなり
○此川岩切とゝ　行れ乃事ハたゝ　忘ハたゝ
○家紙　とハ　俗塵とゝ事也　塵と出ること
いとをかし
さびしき家もあるまき山とこゝろひ乃月ハ四とゝろ
いとゝ　分ハきちの中にて　宇治紙
○入ぬる磯　とハ　いそのなみ　なる　汐のみちたるとゝ
みちあるゝ入ぬる磯乃ゝ　神さへ　波の　ゝふ　ゝ
汐みてゝ　のゝ磯の　ゝ　ゝ　ゝ
あれを　ゝ　ゝ　入ぬる磯　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
汐ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
野　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
○家ぢとゝ　家へ乃ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
乃つゝ地　山ぢとも　同　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
○家の風　とハ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
久さ乃月の　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
樹　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
樹　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

若狭とも橋乃うひぞな紀月の林乃めかいらひ
家の風かゝぬ箱こゝゝづれ森乃ゝ紫ちゝ〻ほるふ
名ぞゝる紀月やゝつゝとをりほゝん　家紙
○八月十五夜乃作也　ゝひ乃月ハ橋ををりて
名ゝるゝゝ也　ゝ乃霧白なり
○編田姫ゆゝ乃ゝ　天地閑閑乃時一乃大
地ありゝく人民をゝゝゝ宮ふ一人の姫あり
しをのまゝゝと。ゝうゝゝをの宮神姫とゝ人の髪
ゝをゝゝゝゝひ　かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
地よりゝゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

三ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
○いをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
河宮ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
○いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
○いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
○いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
○いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
○いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
○いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
○ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○いそさく乃神　石裂神とも。虚空神の事なり

○一説天門のほとりに成ル神也

○おそれる女神とかくり。虚空をもる神也

○いそさくの神乃さとりハ　ものしれる人生来ル清明

いそさく乃神いづれもあがりしん天の系よりある月数

○いたもで苔　磐ち生苔とも。おべよりまる也いつま

○であくんとそもくあがなるんよ用ゆ

表ていつまで苔乃いつまでとなるべし　ヲ此てくうて

○いちり乃地ハ　震雷子の花也。乃のちりのいつ

○をあるいちね系ともあ也とゆいらどの乃まる

芝系ともいつり。弁のさ活ゆらりて行るべし

○いつまちがとハ　あるべきさ事のちがとゝ也。水乃

底ゆ火をといそとゝ云也。私云いらどゝ分

別と記す。ここでもちやう乃心なるべし

○伊邪理とハ　柴室也。又ハ神離也。又ハ殿とも云

○ねのくびあるとハ　さくびたるといふ。星なれる也

○いさとげなるとハ　表ざと記とゝる也

○いとぐしく　弥助とも云。人をいとぐさへなり

又いとぐさ　ひとつあるゆふるゝていよ物也

いとぐちく　ものゝ系ふうゝやまゝてゝる活ル

○いさとり人とハ　勤功人　表ゆ忠義の人也

○いさむ　勇とも云　ものけさん也

○いそもよこうしく　まそ鏡なども かさなる事也
○おそしくともよまあり
　岩ぐゝの凝ぬ心よ入初て星ちるうしくいもぐそは
○いへどうしゞ　とハ　家もとゝ云　女房のゝ事也
○色ぐ紅月　とハ　九月の異名也
○いろごのみ　好色とゝ云　恋の初ぐ　ゝ　ゝ　紀人　とハ　ん
　ち紀人なり
○いまゝりとゝ　何ハ　いまゝりとゝ　ゝ　ゝ　也
○いぬぐくとゝ　何ハ　ゆゝぐことゝ　ゝ　事也
○いや　早とゝ　ちづ山賤よ限ゝ　ゝ　ゝ　信　信六
○位ゝ　何也

○緑ちる山ゝ　色やゝ　ゝ　ゝ　ん　いやゝく　山ゝ　ゝ　初時　ゝ
○いそ小ハ　述懐なり　生死ゝ　海ゝ　云　あれを　生
　死の浮沈　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　水　ゝ　ゝ　ゝ
○いゝ　ゝ　ゝ　ゝ　何ハ　ゝ　ゝ　事なり
　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
○平潔　潔　潔同　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
○ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
○いゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
○いゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

○ゑれぶとは　ゑとをえんぷよりしへをうんぬ也
○いとゝは世俗にふぷんをいとゝ何もさらぬ事也
○いとるむとは　ゑとを牙の紫とをえ事　管乃字をゑ
○逝とは　ゑをえたりぬいをうハ行也
○いをを紀とは　服を何をう
○いをうなくとは　礼はをむく事也。日本紀に礼とゑ
○いざてとゑ何　ゑやと紀とゑ事なり
　風はのおをう沙あひをくともいざてゑをむてれ庫
○いちくうとは　色くうを猶おくあるゑとゑ
　市倉　又蜂とゑ
○いゑうぐくとは　ゑをあてよ紀ゑ也。善悪よ通をう也

○へあやとは　月日又ゑ乗乃入えなどゑんえ
○いうり紀とは　おそゑる何ぷ人の美をよ付てゑ
○いをけく　いをを紀とは　鶏ゑんは　日本紀よ見をう
○いつをうーはくとは　鶏ゑをう事也
○いををうりてとは　おをしまたと何也
○いゑうぐ　鮑とゑぷあうをーとゑ事也
○何揆とゑ何　いゑをうとゑ何
○いゑぐうとは　おりひやをんをへー
○いゑをぐやとゑ何　生をかやとゑんは乃何也
　いゑるかや宮結川乃ゑをうぐをう我大ゑ乃ゑ兵ゑれ
○いざて　ちいを紀ゑの子也　雑度なり

○いろ紅葉とハ　一ちらしをのあさ紅葉也

ゆふくれあけいろ紅葉　秋の風　後人不知

○いぶさ　瑞籬と云。こづゝさ。玉がきとも讀。神垣也

○いく紀乃路とハ　七さ八さなといふ句

○とちんとハ　やどちんとらう句也

いまゝんといひしたりよ　五月乃五日の月を指ふ

人をあろそおろろといふ句

とちんとひていそくとをまやや　宗祇

人をうんとたぐりて行人をんをとろうなふ

おそろしいえてあのまね物をと云也

○いろく衣とハ　はぐるまといふ也　たりめ衣とも云

○きづの物紀末とり水と物起て色て衣袖まとり行

○いくでとハ　行とりてとらつてふと也

○いでゝくとハ　いぐうこ紀なり

○いくゝとハ　御幣乃幸也

○いとゝぬ色とハ　やとゝぬ紀の色乃色也

山ゝ乃花色衣ぬ　やはとゝとあとゝとらるゝ

遍照の云るゝおれゝ山ゝをいとゝぬ色といふ

○いうゝるゝとハ　ゝるゝ乃幸なり

○いとゝやとハ　完早と云　物のとゝやきに也

○いやとゝのとゝふとハ　いやゝゝ毎ゝとれに　弥年助と云

○いゝもうゝをとハ　とゝうといふ句也

○とをも咲旬ふる人 橋乃小島がさきの山吹乃花

○石ゐ井とハ あまれ物よりいでて井乃極をれば いを

とり入てあぎいづる也 これをゐ井とハ

○松風よ面を世て袖ふるとハ いたる也 明石乃浦の延乃石ゐ

○いそなとハ 澗乃戸を云也 命

我のみていそなる山ぞ 宮乃まぐ人さそ初るとそ思

○いろさそとハ 雪をとハ いろり

いろさそ花を也 これハ 隆ふるハ 未だ編戸を閉て

○いそ〻かゆふとハ 恍う事ふるを云也 業平

日ふる雨濡乃ゆふ ゐ井ふる人 いそ〻かけゐ

○いさゝらく 清廣 潔日と云。月日星水ふるとゐを云

○いもゐとハ 物ばぢ いもるゐ也 いもるひゐ ふるもいゐ

○いさゝゐとハ さそゐ井也 誘ひと云

○いろ乃ことハ 兄乃親王也 兄親王と云

○いろとものみとハ 弟の親王也 弟親王と云

○いろゐ 兄也

○いさゝやむとハ 禁殿乃事なり ○いろ 妹をいゐ也

○いまやう色とハ 紀乃うまと紀之の衣也 今様色と云

○いくとゐ河 はくとゐ河 くとゐ河なり。又むるどを

○いくちゐそとハ 河をさゐをなり

○いさてゝとハ いさてありゞ紀と也

○いとむとハ 挑と也。琴ふハ女乃そをとるゐ也

○又戰をいどむとゝ。又酒うちくぬひ出すといどこつて
　ぬをあらそふ也
○いろりを紙衣とゝ　初ーうちくゝにうちくゝにはめて
　きる也
○いろ紙ゝうまとゝ　くゝそいて紙人うまと云ふ也
○いをとゝ　鼻をとろ網よ縒りてたるを網を付る也
　いをおろす方こうあるれいせう油塩こぶ
○いろは　甲磐函の名和といつり分ける事
　ちくぬ川まを行水をとゝ流ていく氏実乃高雪
○あるうまをひとゝ　京四条をとりあてある神也
　日こうひいりをて乃ふん也

○いとゝ　ゆうりあへーとゝ　いとゝつりきとゝ心
○ゑ百摘立とゝ　ゑ百ゆてゝそゝたゝこゝあゝぐたゝこ
　だゝり　虜ゝさゝをいふ也
○いろゝ乃ゝ
　ひき抜ゝいろゝ乃ゝの出ゝ乃ゝ　東陸
○いさゝとゝ　鼠也
○いさゝとゝ　ゝいさゝ　ゝゝ事なり
○いゝゝひゝ　とゝ　いゝゝゝと云ふ也
○いゝとゝ　夢と同也。いろゝ人のゝゝとゝあゝ
○いろゝへのて　弟業十二　妹也物といつ
○いやゝきゝ　匹夫とゝ　ていやゝきゝ人とゝあゝ
○いゝゝとゝ　忠功の事なり

○いたくうとハ　玉澤とも　帝王乃御門の意也
おそくまして事也　速露　玉澤
○いとハ　たゞかるゝ　といふなり
○ゐ串さしとハ　貴乃乃　いそ乃乃を宮門に
さしたりゝを也
ゐ串さしつゝ　新宮　隆子一　歌問　ゐ
又井串とハ水口ゐ　ゐより用れともいつり
被菌　ようとて乃玉　丸をして井串ゐんとつゝ
若水をせくゐ　ゐ　ゐて　ゐ　代小田乃種　紀
又御被　ゐ　と用也
六月乃清　ゐ　ゐ　豆　ゐ　ゐ

ろ

○ろうさうとハ　六位乃裝束也　ろうさうのうへ
とゝゐと伊勢物語　ゐ
○ろうとハ　楼閣　結構なる家なり　楼
は
○ゐをとゝとハ　たゝふる事也　又ゐをとゝふるともいつり
○ぞゐり乃庭とハ　いやしき家乃事也
○ぞうづうとハ　女のうづくゝもいつり　又三月ゐ
てきうかつゝ也
唐人の舞をうつして　遊　ぞ　ぞ
又ぞ乃つゝふとハいふ　ぞ

さくら
年

○むめのくもとハ　花乃影のうつりたるを云也
さくらの花の陰となる水をちりかゝるをや景といふ
落花清く流をながし物をさくらにたとへてむ乃下ゆ
○ひゐなとハ　御雛ある時ならべおく人形の事也
雛遊と云。節句にかざりおくもの
みし人の形代ならばオぼえてなき時のまで物まん
宮川はよもや山田乃うちらへ萱　宗砌
○よるべ髪とハ　あまねく髪也　みだれ髪の事也
○はしゐとハ　縁に出てすゞむ事也
○まつりとハ　ろくに民のため也
○ちぎりとハ　ちぎりかはす也。人の心を推量して

たましき也
○まつりごとハ　蔓延と書て　ひろく云也
ゆくすゑまでの事
○ときはの山とハ　仙洞也　それを比して仙洞を申也
玉椿ニてひさしきことをときはの山乃幾代ハつきせぬ　清輔
万代をとはへに玉椿もときはや乃山のいはがね宮と　定家
○まつの宮とハ　東宮乃御事也。あまねくをまつのことも
ちぎれ数とてもある也
○星行乃空より帰るまつのかげにて千世のことをみそなはり
流るゝ水乃末なかにぞよろしく松乃深山乃陰と云
風乃音も雲の宿乃内にさらさらきこえるとかんずる小

いとけなきさまなりなどいふなり
かぎひろさ三尺乃深山は日のおそく　宗祇
○たぶれ　雪といふもの乃事にさてある也
又たぶれハ　雨乃ふるまぎれ也　降る雪に
○さく乃紫よりたぶれ　雨ふりおとひあるゆゑ也
といふ　もしてをおもふ
我宿のすゑの紅葉さそふ　ふるとそれ乃いまさかりなる
我宿乃菅いとく咲なる八重をそれはもやちるん
○たぶれよあぎて　いそぎてあり　神也　ふる雨乃すを
なとふりあぎてある也　かを門をたぶふあをて
ふるとあり

○ちるもぶれとハ文字ふるを云　老也と云
○ちいさんと　あくの事なり
○花田也と　そこいろとる也
○紅葉ちる夜と　ちりをあるり又秋乃暮とをて
菅もようけりあるをとよりそへて云也　ちりをの
ちる字をとそへてよむへし
○ちる雨ひさしと　濱なる岸なとにやうあるをあれ
ぶれく　上のひさし乃やうなりあるをあ
又濱よある家をも云　あをびさしとも云
或ハうつかなる神也　ちるを乃うつかふ見あり
ちるひさしとも云なり

くまのゝ御幸の時。庭上一首とかゝるなど。宗家に
霰ふりぬ宙の浦の浜庇ひさしくなりぬ先の白鳥
○さくら河とは さくら山なるゝ神也。女なるて入るもの
初瀬の宮の桜のなかるゝ雲をみなて白ふ春風
○はつしほ花とは 花しほりは 宮乃心也。さみれ二くく
さくおもふし、あまれと云。又もしたるあくまとも
やしめらるゝなり
○なごりのとは 花を入れ籠なり
○えびすの税とは 元三の日のなる也。蛍はよろひ也
則よろひとも よろひ・蛍固はよろひをうるむらん也
一説に乃蛍はあるむで。年乃始の税也

○えびすの税ひして。ゆうちゐりぐりんをさへとらよせ
てとらるゝ。たゞつきさ古木のやうしさ銭を五・一の年ミ
をちゐ大根をちゞちぶるとをを税也
○さるさとは 将也。詞乃くみとけ也。一説又あり
时為神あつまりけるあちこちくまでまいりぬ麦をつ
庭衣さて 神のしきの風つる衣とみをとらむ人
○鴫の秋とは さまくにいへり。鴫も秋は ゆくまえとれ
秋とらしいへり。吹とは鳴也。又絹也説ハ。廉と
时。紫ろぶをさして。其中に居て鴫のなくおう
きをされば八のまうく其あつり人の ゆゐ也
。それを鴫のもらふといへり。又鴫吹風とハ西より吹

風を云也。或云。秋乃はぎをとりてんとて。蕃籬
さして綱をたちうゑ。嬬戸くりて。をとめ哥をよむと
たとく宮ゐと打也とつくり
物まぐ紀徒と風乃源。きさを嬬戸秋よ成やたあらん
○菊の枕とハ 本紫を也新也
玉拍葉ゐまあらうをゑ月面ふ枕乃枕のたあるふ
時しもあれをハ菊ちる乃枕 月まをうに成ぬ杜の柏木
をを枕もたを紀自ふちる本枕ふ 後人不知
ちぐしふとをを菊乃枕をを 同
我もとをちをう紫をるのうをる月 同
○はをを 第本 杜乃甲ふ出ぬくをるをまあ云

よろうろうをををてををへうれを見ををあ也うれ
ゆへありとハみえてあらぬとあり
うれ菊やをを屋ふ枕乃ををみえて色
ををなぐ乃ぐくなうをふとあうを也
倍ふゆををもあうで湯ふ天ををやをおひあ物
○花山 とハ一ふを清水乃東山神の色をあり
倍ふ遍昭すうを所なり
ををとををいをもかしを山ををしと名ん色ふをを
行幸あをを菊乃時遍昭ゐうをを也
○ををれハ みをれハ 表ハをハ乃ををを也うれを
○をうふを色の乃をれ乃をハをあ也

○もをかざして花乃うへ

嘗乃笠ゆへ梅むちをうてかざしん者うへ

花ざくらと梅の花乃笠は似うへ

かざせども花もかなはぬ世ぞ花の面をうつしうへ

かざして花をやうさくら人　心敬

○はるう　梅とを毋ゆへ乃ゆ

姫乃双紙をうゆ物乃おくゆ出付をう美ゆが

母のうへ

本ゆ中ゆうへあつあたう云紫をうゆ杜の記念乃

天暦乃帝より伊勢が家集を始乃中勢

にちひて出給ゆ

芋ゆうへ乃花乃宿乃花紫本中ゆう落行れ

建仁乃周山堂入唐の時。りうゆうへ

庵乃ゆうへ乃ゆ日乃ゆ乃紫苑や

ゆ　さちゆ杜風ゆ

ちうゆや我ゆうへのことゆ

古今有毎杜風深猿館　人書雨魂

ゆ待ゆう付ゆう

○むまひちゆ

又梅乃ゆうへゆ花をゆ

うちうへをちうへ人ゆ物ゆうへ我ゆ

ゆうへゆ乃ゆ

ちれる梅乃さくらとをもて方人ふかの乃ちを
と四ろ[illegible]れ[illegible]
まぎれる聖人ふ先[illegible]
しふ[illegible]
ち二首を旋頭哥なり。掟乃ことのハぢを乃歌ふ
一首あるをもを也。哥乃ことをいひるゝ
あれど我こゝろん花の名よあらんと。梅と書
敷れんまゝりぞれら梅といひるゝ乃花と
ゝり
いひるゝ乃ちの名ならぬるもひられ　宗祇
梅ゞ香ハ人れいひるゝ[illegible]

すとゝ[illegible]
○[illegible]ハ　比翼連理なり深き
ちぎりをこゝ也。長恨哥ニ在天願作比翼鳥
互地願為連理枝とあり
○そやくゝ乃まゝ　舊乃字をやくゝと也。そやくゝ
ゝ也ゝそやくゝ乃ちとハぞくゝ乃ちとゝ何也。山川の
そやくゝ乃ちとゝあるハをゝゝ乃ちなどいるゝ也
天神乃御詠
舊住處東去菅亭席新居家西州梅庭床
ゝ此川乃ちゝや人ゝ乃ちはゝ乃ちゝ[illegible]
そやくゝ乃ちゝ衣乃ちゝてゝ乃ちゝ[illegible]乃袖

○はまふぢ乃中屋と いやしき小家也。去年生中屋と云
を中ふとハ黄なる也。又をふ乃こやとハ
とぢはまふとだらいとん屋ちぐ也。ちやふとぢらハ
岸乃くづれをいまもあり　古の荒の川岸
をあつてとゝろみ又住吉乃松のもとふをふ
りてなどよみしハ去のくづまて岸乃うつれる
なりもの神也
○色のべをふ乃こやの移ちるをあもりて咲ゝ多新都
はちハはまふ乃中屋とよゝたる也
住吉乃岸ふ生ゝる松ぢ新あしりくをちをあてら
ちれたゝしのくづ也どとをふとよゝあゝ寄也

○嬉乃杖とハ　ちとハ物よりおゝをあゝる也。故よ老人あゝり
ふつきゝあふぢはゝをえ乃ちゝふ嬉乃乃杖作まて
更新也。素乃木ゝて作也。揉素花とゝふ舞れ乃
もはこゝろゝり
やゝゝ山神やきゝん嬉の杖都てゝゝ乃のゝとゝ
○をゝ河水　海水　海也乃底ちゝて木也
あまてをゝ海水の杖よあゝ賜乃国のゝゝ嬉遊
はゝ寄ゝ世中ゝ也ゝづふ作ゝ元とのん也
○濡衣とゝをつまよかゝてゝ知ゝ忘ゝきゝて人ゝ
○むゝ乃花　花ゝ杖ゝを付ゝる也。詩ニ云園ニ更ニ有ル人
花鈴　玄宗皇帝。牡丹ゝ名付ゝ也ゝちゝゝを

揚巻姫とそりふるて牡丹ゆきぐもとにてくて
○ゆきもとをふれそそぐ　ゆきもとをふれそそぐ　ゆきもとをふれそそぐ
○たちあらそふとハ　人のたちあらそふあらさる也　教授
ゆ　ゆたちどをせじとと云詞也
ゆハ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ
○ゆたつ　とハ　始とと云義也　又たちとハたちの也
千載　世といとふたちとと　西行　おやもく人を　ゆたつ
かぎりなく　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ
あ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　宗頂
ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ
○初雪　初雪とハ　初也　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ

いとせ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ
○涙　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ
ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ
○　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ
万一　白浪乃涙　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ
月やら　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ
○　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ
着　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ
○　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ
ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ
○　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ
ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ
○　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ
ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ　ゆたつ

○ちどりしの鶯とハ　羽くろくきたなき鶯の事也
又まねらち葉の里に都ち来りつゝ思ひたちたるしるし鶯
○はつねとハ　初鶯なる也　一説に呉竹をとりて鶯のなく
より或云せうこもあらたまの鶯はじめておもいで
宝(まだ)きゝし鶯なる也。これをまたいふことはじめて鶯
とも云也。又をし鶯とハ小鶯の事也。小鶯をば
鶯乃子ともよむなる也
○なれてをさきさむことに鶯鳴ものゝ声に似たりとつ
○なくをりとハ　花さく比を必ずくもらうさまをしる也
折ふしに雨もふりねなき鳥も来るべき比なる二月比也
○花の兄とハ　ちりたる梅也。去年の古梅もさかりて

乃詠也
あさてよりハちる花なぞ花簾まへに須のはとりん其の花に
を酒萩とハ　芦をも云也
濱荻の多れどもどろうに夕霧ちる田面鶴を鳴哉　人丸
○針目衣とハ　ほぐり乃袖と云。をりあて玉かくぬひされ
たる也。俗よてくれとふう
山賤乃みじかき針目衣まとて宝をもちし夕は何とぬるらん　行平
○ち萩とハ　あまりかる草乃あれさる所よおふる也
作るべき菊やなるらん小山田に流がつれを見る雨もふる　伊勢
○をミつさ乃もとハ　かしきれ蒿を云なり
閨ちるまたこつきの空ふよ風吹ぞ結そてそよめる秋の夜

あまたなりとハ　多くといふ也

○もとあれなれとハ　おちぶれぬまとといふ事也。一説

もとまとといふなり　もとつとと云何也。ネとなれ也を

はなれなとよあるまし

○もろ物　惜士　いづれ乃上てもそろるよもぎなる

惜学乃人ど云なり

○たるハとハ　山乃さきゆるるといふ也

我のそやをもろとんで武限のたるふ多きれいこと

奥州あけくまとこそ乃松といふ

○そろ河とハ　以栗稗麦豆乃蔭田種子

○ぢつこん　拙腹と云　人なぬそんでもといふ事也

ものとへだなるこまの中にいちるくんゆうげごと

○もろろくなることもてもしとハ　物くしうぬん

とみたり。河海と傍側とおろへなるんと物

せろまおおぢ河ものの

○はものしの　花乃さくに稚名鶯て人

を惜もてあ多也　ゆもとちるさしとて風を恋

ふるもいろ

○もろこしむ　もろこと云事也

○三月乃雨のもちぬ　ひくり　燈ゆ　ぢ　澄　ものもる　搗

こもちぬ　ひくり　ひとりよハせ　と云句

はるかに茅葺の家のうしろにたてるを見て　宗祇

○ちもとを繁　六月の月を蓮の葉とよめり。花の香

蓮乃上の露を極楽といへり。極楽のうつくしき世界なれども白蓮にて蓮にたとへたる也

○夏池　水温まるにしたがひ蓮むらがり

夏池と。池乃蓮に水温まるにしたがひて蓮むらがりて花咲みちて

新つゝを花や昼さくらん池乃蓮に水温まるにしたがひて蓮むらがりて

なさるを法とやとゝむ水温まるにしたがひて蓮むらがりて

○ちもとを　まつりごとの也

まつりごとの也

○むつまじ　むつまじくあるべき成はなのうへにをしまれ

敬ふべきもの　一字つゝ長字をふりく事と

源氏に法華

○ちもとを　狭間とは物乃間なり

遠ちの見えてこの海ふ独ゐて人めをもつて物思ひてや　あり

○ちもとを　絵にも板にも也　樹中乃ぜちをもとをとる巣也

京行天皇乃御時肥後国宇土郡ちもと海ふ

ぱ巣ふたりてちもとをとゝ一ごとの言葉

は伝ひてべきとゝ一さとあるとれ　元白ふちを

ちもとをとゝ　年中行事　初春乃式の行事の

○ちもとく　とは物ふ法華経ふ

○ちもとを　省とは

○ちもとを　高とは　和名抄ふ木の果乃事とあり

○ちもとを　宝部とは　おろかなる也

○花の臺とハ　蓮臺乃事也 釈家たち此花ニ
○花むしろとハ　絹にむしろをぬり付たる也 極楽に似たと
正花にてなしたる也又むしろちらしたるむしろと花筵
とうふ时ハ極楽になる也
○はやて　迅風と云風乃名也 おそろしく疾に吹風也
○橘とハ　木也 秋になる木なり。橘木よりうすく紅葉するを云也
歌によみし紅葉にもあり
○はい入とハ　内乃口を云也
雑門乃はい入にて見たる事柳にしや噂乃人賞成ず
○はうし子　拍子と云　神人の事也
○はしらのあか　見世乃事と云なり

○はしひめ　宇治橋乃清めにまつりし神也
○はゝ草　このまの事也又女の通名ともいふ
○はつ夏　卯月乃異の名を云也
○はちかへし　くろくひに聞る也　秘通と云
○むら雨　おもしろきに花乃ちりたる也
○はなのやりとハ　都を花と云ふ　清くしき所なり
青海京洛拝花容　今作江湖漂倒翁
○むら雲とハ　花みるに添とりたる也
○はかなくて　とハ　くらくて なにとなきなり
ことにあらずと何にもあり
○はる月とハ　上乃ゆくゑりの比をと云也

○もとあらハ　萩乃むかし名也　一万葉集にハ村萩とよめり
月見草　野守草　鹿鳴草　ねふり草　古枝草
いつれも　萩の異名也
宮城野や露もたまあるゆかりの下の秋もあり咲けり　西行
○鏡乃異名と二あるもの也
ますかゞみとハ　鏡乃名也
ますかゞみとハ二ある鏡乃名也　山鳥の尾たりし鏡也
山鳥の尾乃鏡とハ　山鳥乃鳴声を見ても
その影と見て鳴よしありし事也
山鳥乃尾とも　鏡の面にうつりて鳴よしある歌
に
○ゆきなくとハ　風もなく天氣晴て浪もたゝぬ事也

日和と云也
あま乃海やうそく見しかりこしも乱て見ゆる蜑の釣舟
氣比の海ハ越前つるが乃名所也
○ほそつとゝハ　庭乃かけり水なり
ほそくと雨ふるさと見るたつ二藏て涼しくもなり乃よし
あらしみよ庭の面ハ秋の夜乃月ハつきかしらぬ(?)
月日ハ水の影とやさしく待やかて見ゆる
ちるけれバまぜと云つる也
○隠岐の院とハ　流人也　承久のみだれよりておきの国へ
よしむね三条西殿乃説也　後鳥羽院隠岐国へ
ながされ給ひし時の御事

我こそハ新潟ちふお紀の海乃あら紀浦風ハ
限あれど夢ぢ新堀乃月もたつとらぬ人の行末
○庭乃をしへとハ 紀のとをしへ
とゝ庭訓也
はたらきハ紀のとをしへ新ごゝ乃ふうさ世をいとせん
○庭訓ちとハ ゆゝちちとゝ也
ちゝ紀新乃ちとをとゝ呼て毒つちまのこれたの紀ひ
○ようひちとハ うぐひすとゝ也
○ようげちとハ 仰合ぬとゝ何ちり。ようげちゝ
仰合ちとゝいふまゝ也
○面ちり乃新法とハ 猫法也。面乃伝法とゝ也

○物ゝとハ 奥乃ちびとて男女ちとゝ人ハ文と
やゝ新ゝハちくて一尺ちゝの赤紙ゝ
毒ちちくごとゝ女れ門ちゝいちゝ也。ちゝ
ちちつゝふちりてちゝ
ハちちいまゝちゝふちりそ。ちゝ
ちゝ人ちゝ
ちゝ人ちゝ毒ちゝ物ちゝ
神ゝ物ゝ毒ちゝ
物ゝちちたゝふちりぬ今ゝハ人ちゝれぬ国の中ゝ
思ひちゝ中ゝ初ゝ
陸ちちつゝ物ゝ物ゝ
紙ゝ立ちゝ毒ちゝ物ゝ細布ゝ

○にはなとハ　美ものもとをつまりおくを也。はなの紙の
　　美ものよりも
○にんとハ　物をおりふんの奥色のあるを也　丹心と云
○おりとハ　猫　わらんとハ事也　彩糸。彩筆。彩管
　　なとゝいふ事なり
○二四八乃時とハ　昏乃時也。従こいとも初めとゝ云也
○燕尺　燎　照燎とハ云祇紙なり。新祇ふとハ燎也
○つゝみまくらとハ　そゝめて寄手なり
○にはてれ　湖乃板こと惑なり
○鳴乃うゝ巣　雑なり
○にはさの車とハ　天照大神乃汗性を綿の車と

紙をゝを也
○ゆゝあるとハ　雲月中の印。彩掌舎に祇を初編を
　　あてゝまはるなり
　　ほ
○ほゝといさぐく　星戴　表ほゝくゝ也。表ほゝくゝ表と
　　表使ゝ　ゝくゝ也。一説を乃ゝをゝ也
　　まとゝて星といさぐく星戴の人ゝ下に成ゝハ
　　あれを紙宣ゝ述懐乃言也。ゝを捨て星戴
　　てゝまゝゝ乃雲とゝ　ゝゝゝゝ也。ゝゝゝゝ
　　ゝゝゝ下藉ゝゝ　ゝゝゝゝ也。歌ゝゝゝ
○ほゝくゝとハ　二説あゝゝゝゝゝゝ又

本式をもつて云也おどろくまさに也
俊撰集十七詞をもつぱらにのりてちひさきいち
こづくりひておどろくまさに也
くれなゐとそく
なびきあるいるやまの芥の高らかにしるを成ぬるか
あれをおどろかさに也
宮ばくらひされもてのく高らかしるめとをつぶ
いはれもぬ式きをいとう
○かをむ　微多とも少多ふ事也
○ほとろかと　天の中也　たちまち回ぬ　寒ある間
ひとあるかとろかしくふ降まさちまち氏新ゆるかゆる

新をををを物をを寒てをむれ、座もををふ
○おどろかと　ををび乃ちかく成て栄などれやをる也
ををれど物人をを死をを蕨のいはをおどろかをんと
○ほやつくる　新屋作　信濃　飯山　那　ををを山をを
乃ををををを時ひををて昼ニをんををる
おどをあをほや乃おをを氏一材ふをを里ある物をを
ををををやの蕨の花風をををを蕨の書をを
○ほをををは　物乃ををを氏事也　をををゆんと
をを時おりあ人ををひをれてををぶをををなどをを
ふををを也又人をふ分のいをびをふををたる
ををこを人をほををれてをを也ををて人まを

かぐさしてを雪月花乃よろこぶもの物ハ
皆ちりしちり
芳りをめかをぬ岩ハいんこの世人ちりぶぐ絵れ
たちまちのびみ字ちれ手ちり
表てふ幸ちりて世界と思ちれぬちりしぬ
山風よむ乃者ちの蘇ちの表乃所でほぐ成ち
○ほちおもちちん物のあちいれちんぬぐれと頼りぐ
宝ちも帆ちちちせてちある
秋乃田のちふちる人を立ぐちめなちんちよ立れもせん
思ふかちあちられてちるいたちもんちよちれ
ちあちぬ

みちち秋ハ明乃浦ふ焼ち宝の印ふちを出ち焼ち立ち
ほちよいぼちとハ成ち事なち。現形ちを表れん
人ちちち我ちハあちやなち世界なちどちかふ立て立ちてあれん
松風ちちふ出ちち秋ちを頼乃あり　宗祇
松風もぞや秋とハ現形ちる物をと頼のあち
おむちひていちんぬ
○ほちち者乃御名ちちちる　冬也十二月十九ちよ
つをサ一日ちで。三千日乃つる。三世の仏仏御
名をちちる人ちぬ。六根のほちをさんげ行ちん
ちのちに宝寿を表ち年十二月ちちでまち
ちの内ふ仏ちる罪を消ぬ。三世乃仏の御名を頼

○仏乃ものゝ雑俎とハ　法のくゆゑあらとそ大わの雑俎
　塙江とゝ下あるもの
○程ゝ雲ゝとハ　ゝ雲死中なり　ゝ雲をきんゝ用
　ゝ雲ゝ雲ゝ雲

○ほうこうふ　絵とも云、花衣　多　なとゝ書とあり
　若ハ柳乃糸とかゝるまゝとそ記て物のかゝるひよう
○星月夜　月よあらぬ星乃月夜乃様なる事也
　別の名　明星　耀夜星　明星ハ夕方ハかゝれ明ハ
　夜星　七夕也　星ゝふ　星のあゝもあれを神ゝ
　ゝゝひ物乃名也　神祇也
○ほこ板とハ　ちいさき板乃事也
　生出　管乃かこ板上人て管ゝとゝぶ板と云ハ
○かゝれ　神ゝかゝり　蛍乃ゝゝもあり
　おく山乃杉乃木の中に明蛍あるゝ世ゝ　ゝれや物ゝ
○ほゝゝろひて　ゝふゝ　ゝゝろゝぶハゝゝふん也　ゝ

をもかゝろぶとゝ書也
○かゝゝふゝこゝゝゝ

乃爲星祇とうへ天地四季の陰陽をあらし
て人民安穏をいのりかなうべき
年中行事
白乃星祇とうまつる事は実に家記にくはしきなり

吳竹集巻一終

国立公文書館
National Archives of Japan